

# 一見華やかな社会教育界の天文

黒田 武彦

〈兵庫県立西はりま天文台 〒679-53 兵庫県佐用郡佐用町西河内 407-2〉

今や 300 を超えるプラネタリウムを所有する大国日本、大型望遠鏡の設置も盛んで、ここ数年だけでも何十という天文台ができあがった。数だけで比べれば、プラネタリウム、天文台ともアメリカに次いで世界第二位であるが、設置密度からいえばおそらく世界一であろう。誠に結構なことである。しかし、それら施設を預かる人たちから悲鳴に似た声が聞こえてくるのはどうしてだろうか。経済大国日本にも、不可能という文字がまだ存在するのだろうか。

## 1. プラネタリウム界の実状

プラネタリウムという施設を筆者は怪物に例えたことがある<sup>1)</sup>。怪物を見たさに人が集まるので、見せ物小屋（自治体）の主人はそれを期待して購入する。怪物のいる見せ物小屋が増えてくると、少し変わった怪物でないかと世間の関心と呼ばない。怪物のバイヤー（メーカー）はあの手この手を使って見せ物小屋に売り込もうとする。「この怪物は逆立ちがうまいですよ」「舌を出してアカンペーだってできるんですよ」という口車に乗って、逆立ちやアカンペーのために高額の税金を使ってしまう。ところが逆立ちやアカンペーのできる怪物は、餌がたくさんいるし、調教もなかなかたいへんである。怪物がかもしだす生物界の妙といったものを伝えたかった使い手は、逆立ち、アカンペーの世話だけで大きなエネルギーを使うことになった。怪物のコントロールも難しくなり、時折、使い手を無視したり、暴れるようになった。怪物が一人歩きし始めたらいへんである。でも主人は気がつかないのである。

山田氏<sup>2)</sup>によると、最近設置されるプラネタリウムの傾向は、大きなスクリーン（ドーム径が大）をもち、一方向座席で、傾斜床ということである。もちろんオート投影を基本とした大型の機械であ

る。

さて、基本的に大型化はいいことだが、問題は傾斜床と「番組」内容である。まず、傾斜床では地平線が斜めになってしまう。これは人間の感覚とは全く相入れない。水平モードもあるにはあるが、これでは見えるはずの星が見えなくなったり、スクリーンに空白（埋めるためにまた税金が要る）ができたりしてしまう。「臨場感あふれる」全天周映画と併映するための産物ということであるが、プラネタリウムのもつ教育的側面が失われてしまい、本当の見せ物小屋になってしまうであろう。また「番組」の基本はオート投影であり、電動紙芝居の域を出ないのはいかがかと思う。わざわざ球形のスクリーンを使う必然性のないものも多い。それにオートではその日の月や惑星が投影できず、プラネタリウムの名が泣いている。

いずれにせよ、上で述べたこと以上に深刻な問題は、専門職員が少ない、増やせないという点である。これははたして永遠の課題なのだろうか。

## 2. 公開天文台の実状

プラネタリウムが70年代から飛躍的に増加し始めたのに対し、天文台は80年代、とりわけその後半からの増加がめざましい。某内閣の「ふるさと創生資金」の効果もかなりあるらしい。

筆者らの調査<sup>3)</sup>によると、ペンション等に設置されたものを除いた公開天文台の数は120カ所を超える。このうち1980年までに設置されたものは30カ所余りで、80カ所近くが80年代以降というから驚きである。さらに、口径60cm以上の望遠鏡を所有する施設が飛躍的に増大していることも特筆すべきであろう。プラネタリウム同様大型化の道歩んでいるわけだが、こちらは単純に大きいことはいいことだ、では済まされない。大口徑望遠鏡は、客寄せパンダとしては有効であるが、まだまだ技術的に克服しなければならない点がある。大きいだけに気流の影響をもろに受け、シャープな像もなかなか得られない。公共の施設では中・小型の望遠鏡を数多く設置した方が効果的な場合が多い。ところが自治体にとっては「日本一」というレッテルはたいそう魅力的らしく、大口徑化競争は止まらないのである。

筆者のいる西はりま天文台へ100以上の自治体と関連する団体が視察・相談に見え、そのうちのかなりのところで天文台が設置された。ハード面でのアドバイスは比較的かんたんに受け入れられたが、ソフト面、とりわけ人の面でアドバイスを受容された自治体はただの一つもない。人もとらず、金も出さず、大きな望遠鏡だけあれば何かができるのではないかと考えられている節があって、天文台が増えていることを必ずしも喜んでいられないのである。

なお、調査の結果は各グラフに示しておいたが、アンケートに記された個々の施設で直面している困難で深刻なものは、

- ・年間労働時間が異常に多い
- ・春・夏休み期間は全く休みがとれない
- ・労働の割には給与が安い
- ・常勤職員がいない、あるいは少なく本来の仕事に専念できない
- ・変則勤務で、家庭団らんの機会が少ない

### 3. 充実した社会教育施設を構築するために

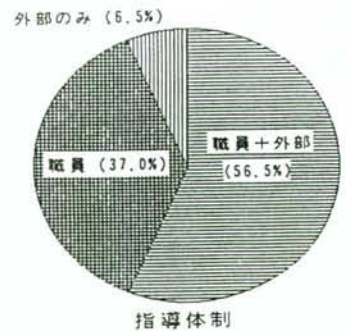
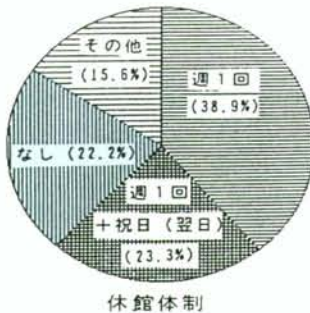
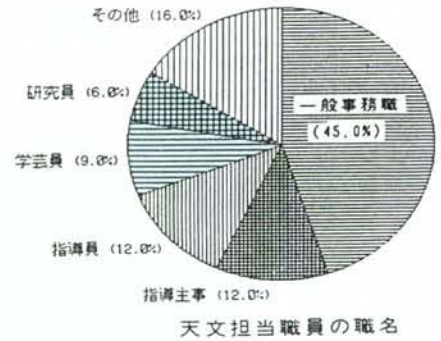
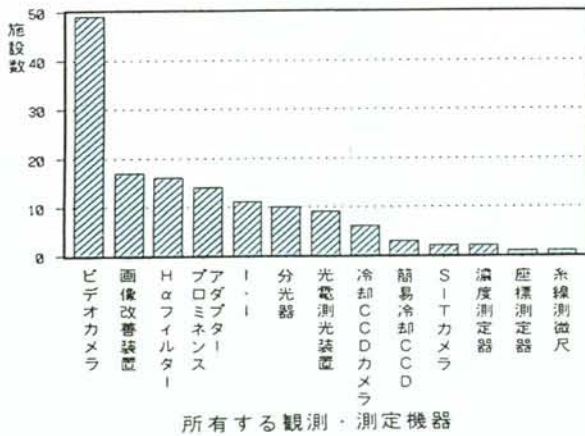
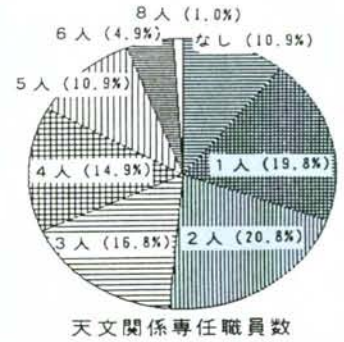
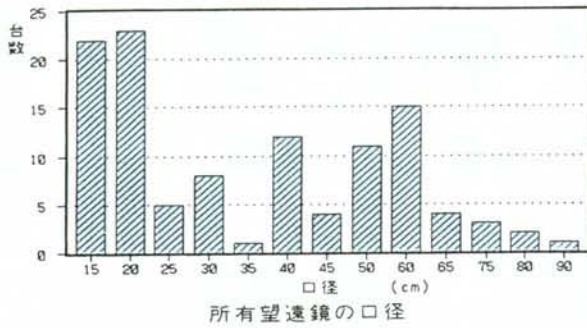
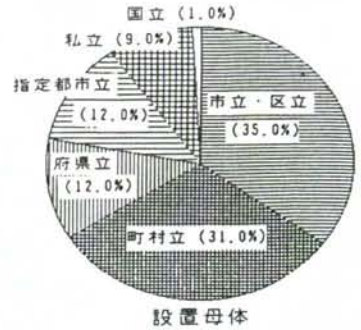
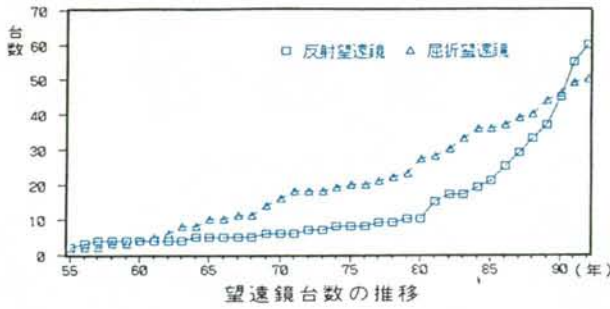
どんな施設であっても大切なのは人、金、モノである。しかし従来は、モノを第一義とし、人と金をどう抑えるかが重要だったようである。これからは、モノを生かすための人と金をいかに確保するかという姿勢に転換する必要がある。

科学館や天文台を作るとき、必ずといっていいほど学識経験者という名のもと、大学や研究機関の専門家が検討委員会や設立懇話会などに名を連ねる。一般には自治体側から計画概要の説明があり、チョコッと議論する時間があるがシャジャンの場合が多い。「学識経験者」は単なる箔づけに使われているにすぎない。計画に具体的に参画していくことは比較的まれで、実際的な仕事をする人間の何倍もの謝金やお車代を手にするのである。言わずもがなである。

よしんば計画に参画できたとしても、ハード面がほとんどである。もちろんそれは自治体側の作戦で、へたに運営面、特に人的な面にまで口出しされれば厄介この上ないのである。しかしそこは「学識経験者」、高い学問的視野と研ぎ澄まされた眼で毅然たる態度を貫いていただきたいのである。そこで作戦の数々……

- ・新設のための何等かの委員の委嘱依頼がくれば、簡単に引き受ける
- ・自治体側から委員会の目的などが正式に公表されるはずであるが、人と金にまつわる運営面の議論が対象外になっていけば、それらを検討することこそが重要で、委員を引き受けたからには避けて通れないことを強調する。
- ・運営面の検討が委員会で不可能な場合は、委員の辞退を通告する。自治体にとって委員の中途の辞任は大問題であり、委員の要求を聞き入れる場合が多い。
- ・委員会で運営面の検討が可能になれば、あるべき姿と現実的対応の両面から攻める。現実的対応というのは、決して自治体の事情を理

公開天文台資料 (110施設)



解するものではなく、施設の最低限の目的が達成できるものでなければならない。最低限の線を具体的にあげるのは困難であるが、ご自分がその立場になって働く場合を想定してご判断いただきたい。

- ・最低限の線へ自治体が歩み寄りなければ、そんな施設は作らない方がましであり、参画することが恥だとの立場で委員の名簿からの抹消と辞任を通告する。

こんなゲリラ的な戦法はイヤだと言われるかもしれないが、この程度のことをしなければ生涯教育に真に責任もてる社会教育施設はできないだろう。それほどまでに社会教育行政は貧困なのである。中途半端な施設をオープンさせてきた愚をもう繰り返してほしくはない。

さて、最後に既存の施設を生き返らせる方法であるが、ここでも「学識経験者」の力を必要とする。自治体の「学識経験者」好みをうまく利用するのである。施設の担当者はできるだけ講演等で大学、天文台などの研究者を呼ぼう。大事なことは、講演そのものよりも施設長あるいは自治体の責任者と講師との接触である。担当者はその辺りの根回しはきっちりとするべきである。「講師がぜひお会いしてお話したいとのことですので」といった方便は大いに使うべきだろう。接触が成功すれば、いよいよ「学識経験者」の出番である。もちろん事前に担当者から問題点の数々を聞いておかねばならない。ざっくばらんな話し合いの中で、一つでも二つでも改善の糸口をつかめれば大成功である。しかし、これで終わってはならない。自治体とはそんなに甘いものではない。口約束が簡単に実行されるはずがないのだ。同一の「学識経験者」を適当な時期に再度呼び、責任者にまた接触させるのである。「あのときの話、どうなりましたか？」——これを繰り返し実践すれば活路が見いだせるかもしれない。

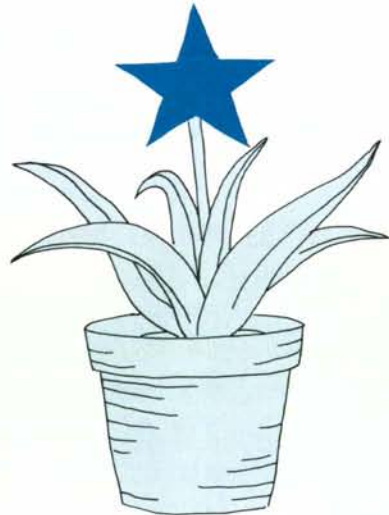
## 4. 終わりに

天文月報ということもあって、大学等の「学識経験者」に演じていただきたい役割の一端を述べさせていただいた。せめてこの程度はお願いしたいのであって、課題解決のすべてを記したわけではないことをお断りしておく。

### 参 考 文 献

- 1) 黒田武彦：1987, 「すばる」(集英社) 2月号
- 2) 山田 卓：1991, 第5回天文教育研究会集録
- 3) 黒田武彦：1992, 公共天文台要覧

(兵庫県立西はりま天文台)



(神奈川県 杵鞭充千男)